

〈解答〉

- ① 1 (1) うってかわった明るい顔 (2) ふしぎなこと (3) エ
2 「例」台風でナシが落ちることを期待し、それをもらってにのいのカゴに入れ、
母親を喜ばせよう (41字)

配点 ① 2は4点、他は各2点 10点満点

〈解答〉

①

- 1 (1) 11～13行目の『光るうす黄色の糸であんだ、あさいカゴで、中にしきつめられた、うす紙のこまかい、こまかいチリチリの上には、うすみどりの大つぶのブドウが、ひとふさ、のつっていた』様子を見て、お母さんは15、16行目『うってかわった明るい顔で「ひさしぶりに胸のすく色を見た……」』と言っていることに注目する。色鮮やかなカゴが暗い家の雰囲気を変え、不安に押しつぶされそうだったお母さんの気持ちが晴れたことが想像できる。「胸のすく」は「心のつかえが取れてすっきりした気分」を表す慣用句。

- (2) 家の中の様子が変わったことがわかる表現として、26、27行目に『ふしぎなことに、そのカゴが来てから、お母さんの食よくはましてきたし、家の中も、目に見えて、片づきだした。』とある。

- (3) おばさんから贈られたカゴの17行目『ブドウは、二、三日でなくなった』が、18～20行目『お父さんが、そのあとへ、モモを二つのせた。それが、なくなると、道子が、じぶんたちのおやつのマクワウリを一つのせた』とある。最終的には秋男もナシをのせているが、ここからは17、18行目『あまりそのカゴをおしがる』母親に対するみんなの優しい気持ちが伝わってくる。そして22～25行目に『何ものつてないカゴの、チリチリにはなをつけて「ああ、いいにおいだ。おばさんのおい、お父さんのおい、道子のおい、みんなまじってるよ』』とある。これはみんなの気持ちに対して母親が21行目『喜んで』いることを表していることから、エ「あわれみ」が適切でないことがわかる。

- 2 秋男は29、30行目『時間が早いと、なかよくしてるおとなりの庭まではいてやった』ことで、となりのおじいさんから33、34行目『風でおちたナシはみんなもっていったいよ』といつも言われていたから台風を待っていたが、結局台風は来なかったのので、3行目『つまんねえな』と言っている。これは、波線部の時点では、秋男だけ家族の中でまだ果物を「にのいのカゴ」にのせておらず、ナシがもらえることを期待して、自分も家族と同じように母親を喜ばせたいと考えていたからである。